

グリム童話の東アジア受容

—日本語および中国語翻訳について—

石 井 道 子

1. はじめに

古来、日本と中国は文化的交流をしつつ発展してきた。ヨーロッパ児童文学を代表するグリム童話は、19世紀末から20世紀初めにかけて両文化圏（日本と清朝、中華民国、中華人民共和国）に伝わり翻訳され定着した。海外由来のグリム童話はそれぞれの地に根付き現在でも愛されている。「狼と七ひきの子やぎ」「白雪姫」「赤ずきん」など、あらすじを語れない人はいないのではないかと。本論では受容の経過を比較し、その違いから明らかになる両文化の特徴を考察していきたい。日本語版については受容初期、中国語版については全体像を取り扱うことにする。

はじめに、「グリム童話」の成立事情について簡単に触れておく。編者のヤーコプ・グリム（1785–1863）とヴィルヘルム・グリム（1786–1859）の兄弟はドイツのハーナウに生まれ、ベルリンで亡くなった研究者であり、文筆家である。日本では「グリム童話」の編纂者として認識されることが多いが、その他の分野の功績も大きい。特に、ドイツ文学史とドイツ語学における貢献は計り知れない。„Hildebrandslied“（ヒルデブランドの歌）、„Wessonburnner Gebet“（ヴェッソプルの祈り）の古高ドイツ語作品やハルトマン・フォン・アウエなどの中高ドイツ語作品を紹介したことでも知られる。語学研究としては、16世紀からの用例を網羅した „Deutsches Wörterbuch“（ドイツ語辞書）編纂という大事業を1838年から手掛け、„Deutsche Grammatik“（ドイツ語文法、ヤーコプ、1819）も記している。伝承文芸分野でも、メルヒェン以外に „Deutsche Sagen“（ドイツ伝説集、1816、1818）、„Deutsche Mythologie“（ドイツ神話学、ヤーコプ、1835）を出版している。グリム兄弟がドイツ語研究及びドイツ語文学研究であるGermanistik（ドイツ学）の基盤を作ったと評価されている¹。

グリム兄弟の関心を「ドイツ語」や「ドイツの伝承」に向けた要因はなんであったか。それはナポレオン戦争（1799–1815）であった。ナポレオンを前にして1806年に神聖ローマ帝国は崩壊し、帝国を構成していた連邦諸国はナポレオンの従属国家となった。最終的には連合国が対フランス解放戦争（1813–15）に勝利し、ヨーロッパに新たな地図が描かれることになった。この時期がグリム兄弟の青少年期にあたる。出生地のハーナウも1813年10月の戦いで解放されるまで、フランスの影響下に置かれていた。この環境で、兄弟はフランス文化

の影響をうけつつも、ドイツ的アイデンティティを確立するために過去へ遡って学究を深めたのであった。背後にあるのは、アイデンティティの表象として言語や伝承が存在するという思想である。グリム兄弟の功績はまさにドイツロマン主義の流れの中で生まれたものであった。

本論で扱ういわゆる「グリム童話」の全集 „Kinder- und Hausmärchen“（子どもと家庭のためのメルヒェン。本論では『グリム童話全集』とする）は初版第1巻が1812年、第2巻が1815年に出版された。その後内容の改訂、追加などの変更を重ね、1857年の第7版が最終版として流布している²。

2. 日本のグリム童話受容のはじまり

グリム童話がいつ日本に入ってきたかは定かではない。1873年（明治7）出版のアメリカの英語教科書をもとにした翻訳が最も古いといわれている³。1886年（明治18）にはローマ字表記版のカタヤマキンイチロウ訳『羊飼いの童』（グリム童話152番）⁴が出版されているが、原典は明らかでない。また、物語集としては1887年（明治20）の菅了法（筆名桐南居士）訳『神仙叢話』⁵が最も古く、10編が収められている。表紙にFAIRY TALE/BY/SUGEと書かれ、英語版からの重訳であることが伺える。

この時期、つまり明治20年代の日本は近代国家を目指し、担い手である良質の国民を育てるための教育法が模索されていた。その中で西洋の教育法に準じ、西洋由来の読み物を利用して初等教育にも役立てようという発想が生まれるのは自然であった。グリム童話の『神仙叢話』以降の受容形態は教育現場ぬきには語れない。

ところで、ドイツでグリム童話はどう読まれていたのであろうか。上記のように、グリム兄弟の動機はまずドイツの心を記述しておくことであった。1857年の第7版までの改編の結果、残酷性や性的要素を排除して「子供と家庭」にふさわしいよう、楽しくかつ教訓的な色合いを持つ物語展開に整えられていった。近代の科学的教育学を構築したヨハン・フリードリヒ・ヘルバルト（1776－1841）は、倫理学と心理学を融合する教育法を提唱したが、その際「グリム童話」は好都合な教材であった。実践方法は道徳性概念を教育目的の頂点に置くという考え方に基づいている。そしてグリム童話がドイツ帝国（1871－1917）の小学校教科書にとりいれられることになった⁶。ヘルバルト派の教育学者トゥイスコン・ツイラー（1817－1882）、ヴィルヘルム・ライン（1848－1929）らは教育上適切な童話としてそれぞれ十数話を選んだが、これらはドイツの小学校教科書に掲載されることとなった。「狼と七匹の子やぎ」など、動物昔話が比較的多い。教訓話として動物寓話を選ぶのはイソップ寓話の伝統上にある選定結果だといえよう。その一方、ドイツ民間伝承文芸を教科書に取り入れた点は、従来の聖人伝のような宗教的教材からの脱却による、近代的国民国家を目指す意図もあった。ヨーロッパの普遍的な価値をなぞるのではなく、ドイツ由来に限定した新たな伝

統の創出が狙いであった。ただしグリム童話そのものがキリスト教精神を基盤にする絶対的な道徳観に支えられていることは言うまでもない。

さて、明治維新後の近代化の経過で、日独は多方面にわたり交流を深めていった。教育学においても日本政府はドイツから近代的な教育法を学ぼうとした。1887年から三年間帝国大学で教育学教授を務めたエミール・ハウスクネヒトを通して、ヘルバルト学派の学説が日本の教育界に取り入れられた。また、ドイツ派遣留学生らが帰国後に具体的な実践を提唱した⁷。ドイツ派遣から帰国した樋口勘次郎は1897年（明治30）に「修身童話」第一巻を編纂し、ハウスクネヒトの元で学んだ谷本富がはしがきを寄せている。ツィラーらの選定グリム童話に相当するものとして、日本昔話を修身教育に取り込んだこともその特徴である。第一巻では「桃太郎」「猿蟹合戦」などと並び、「狼と子犬」に翻案されたグリム童話「狼と七ひきの子やぎ」が掲載されている。1904年（明治37）に制定が始まった国定教科書には教訓的な日本昔話が掲載され、グリム童話が載ることはなかった。しかし、子ども向き読み物として推薦され紹介される場は多く、ある程度普及していたことが想像される⁸。すでに明治20年代に、「女学雑誌」「少国民」「少年世界」などの雑誌には、紹介者が教訓を謳う一節を付け加えた翻案グリム童話が掲載されている。

このように、グリム童話は日本ではまず教育の場で読まれ始めたのであった。「修身童話」のグリム童話の狙いは、日本昔話との対比の上で、忠孝、博愛、孝行、信義、義勇など、教育勅語に合致した教訓を読み取るべき教材だった⁹。しかし、グリム童話の言外に満ちている宗教的倫理観は日本には存在せず、翻案したグリム童話を日本的価値観に収めて解釈しようという狙いは失敗している。導き出したいのは因果応報や勧善懲悪なのだが、そのような教訓をグリム童話に当てはめることは無理があった。グリム童話はドイツで通用した道德教育の教材ではあるが、日本政府の求める道德観と異なっている。その結果、国定教科書に収められることなく終わった。

グリム童話の「翻訳物」としての利用価値は別の文脈で発揮されていった。これは、後に述べる中国における受容形態とも共通する現象である。つまり、言語表記法の改革における外国語テキスト翻訳の利用だ。1866年に始まる言文一致運動の実践課程で、グリム童話のテキストが果たした役割は大きい¹⁰。

日本で子ども向きに出版されたグリム童話の文体を見ると、表記のスタイルはさまざまである。子どもが身に着けるべき読み書き能力が、伝統的な文語文に変わり日常的な言葉を用いての能力に変わる過程は、グリム童話翻訳の多くの実例からその変化を伺うことができる。例えば、巖谷小波のグリム童話翻案は、1891年（明治24年）には文語表記であったのが、1893年（明治26）には口語表記になっている。また、鉤括弧内の会話文と地の文の文体の区別、送り仮名や仮名遣い方式の統一化、方言を廃して東京言葉を書き言葉にする標準語化、など、現在の基準に近い国語教育の基盤をグリム童話の翻案にも確認することができる。

ではなぜ、日本では日本の昔話ばかりでなく、グリム童話も子どもに読ませたり、読み聞

かせたりすることを推奨したのだろうか。その理由は、まず、グリム童話そのものの面白さにあるだろう。グリム兄弟が厳選した物語は、物語の原石のように際立った個性を持ち、異国の子どもたちの興味をもかき立てる魅力を備えている。また、翻訳者・翻案者の手法にも要因が求められよう。既に文語調で語られてきた日本昔話に手を加えて当世風に改編する場合、当然のことながら伝統的な口調にとらわれてしまう。例えば桃太郎と鬼が現代語で話すのは不自然に感じる。令和の現代でも、時代劇の俳優は映画やドラマで古めかしい話し方をするのが常である。その言語表現上の不自由さに比べ、一から作り出す海外物の物語の語り直しのほうが、言語実験として容易な一面があったのではなかろうか。異国の人々に伝わる話を古文調で翻案する必然性はない。この面でも、グリム童話も教材として適していたといえよう。

3. 中国語の翻訳版のはじまり

日本のグリム童話受容については多角的な研究論文があるが、中国のグリム童話受容について日本ではあまり知られていない。まず、注目すべき版を上げ、翻訳史を概観しておこう。

19世紀初頭の中国の状況は、日本にグリム童話が翻訳された頃に似ている。どちらもヨーロッパからの学問を取り入れる過程で、童話を受け入れることになったのである。中国では、グリムに並び、アンデルセン、オスカー・ワイルドなどの創作童話が19世紀の西学東漸の波に乗り流入してきた。清朝末期の洋務運動の時期に、人文科学分野でもヨーロッパの学問の書籍が翻訳紹介された。自然科学や社会科学分野での進んだ学問体系の流入は歓迎されるものだった。封建的教育に縛られた児童観が支配的であったところに、それに代わる新しい思想と道徳を伝えるヨーロッパ童話の翻訳が始まったのである¹¹。

初の中国語訳グリム童話は周桂笙の『新庵諧訳初編』（上海清華書局、1903）である。新庵は周桂笙の筆名で、「新庵の面白い翻訳集」というタイトルの書籍である。グリム童話8編が下巻に含まれている。

1909年から1910年にかけて孫毓修、茅盾、鄭振鐘が『童話』叢書（商務印書館）を刊行し、グリム、アンデルセン、ワイルド、ペローなどの童話が翻訳された。「童話」という語が登場したのはこれが初めてである。グリム童話は8編が翻訳された。この叢書発刊にあたり「中国で最も早い児童文学の読み物の誕生である」と宣言されている¹²。編集長の孫毓修は教育的効果に基づき、童話の読書を勧めている。翻訳者でもある孫毓修は茅盾（1896－1981）に称賛され、中国の童話の創始者と位置付けられている。

1909年に魯迅と周作人が共訳出版した『域外小説集第一集』は主にアンデルセン作品の紹介だが、この時期の重要な童話翻訳である。周作人はこれとは別に2篇のグリム童話を翻訳している¹³。魯迅と周作人の児童文学に対する貢献については後述する。

1915年に時諧が訳した『児童和家庭童話集』にグリム童話が48編収められている。この表

題はグリム童話全集の原題 „Kinder- und Hausmärchen“ そのままである。

王少明はドイツ語から10篇を翻訳し『格爾木童話集』として1925年に出版した。中国初のドイツ語からの翻訳である。この時期は新文学運動が盛んで、定期刊行雑誌が重要な役割を果たす時期であった。雑誌にグリム童話やアンデルセン童話が掲載され、1925年の雑誌『小説月報』にアンデルセン生誕120周年特集が組まれるほどだった。国別童話集としても、封熙郷『徳国民間故事集』（上海解明書店）、劉海蓬・楊鐘健『德国童話集』（北京文化学社）などが相次いで出版された。1928年に趙景深訳を10篇収めた『格列姆童話集』が出版された。

1930年代で注目すべきは魏以新による翻訳『格林童話全集』（商務印書館出版、1934）である。これは中国語による初めての全訳版で、この後約50年間にわたり、唯一の中国語版グリム童話全集であった。何度も再版され、現在でもグリム童話最良の訳の一つと評価されている¹⁴。この後、1940年代の児童文学翻訳は戦争により停滞の時期を迎えた。

1949年の中華人民共和国成立から文化革命までの時期は文学の傾向が変化した。児童文学でも革命、階級、救亡（国家の危機を救うこと）などがキーワードだった。その影響で、幻想的なグリム童話は宗教的にも文化的にも相容れない作品とみなされた。児童に不適切であると考えられ、読まれないようになった。ヨーロッパ諸国を批判するために、グリム童話をも批判して出版を止めようとする言説も発生した（『翻訳通報』、1952年3月）。この言説は四か月後には『人民日報』（1952年7月3日）で正され、グリム童話の価値が再認識されることになった¹⁵。

魏以新の『格林童話全集』も時代の影響を免れなかった。1959年再版の冒頭「グリム童話全集と作者について」では、エンゲルスがエッセイ „Landschaft“ でグリム童話に触れた箇所を引用している¹⁶。「私は北ドイツの荒野を知って初めて、グリムの『子供と家庭のための童話集』の味がよくわかった。…」¹⁷ 荒々しい自然から受けた幼少期からの印象が童話の形に実を結んでいる、というくだりである。エンゲルス著作からの引用に中国建国後の思想的背景が透けて見える。ただし、エンゲルスを原典出版当時の読者の一人として評価するならば、この引用箇所は興味深い発言である。北ドイツを訪れた際の感慨を述べるのに、風物の体感とグリム童話を結び付けている。グリム童話は確かにドイツの同時代人の感性に働きかけたのだ。この版の「後書き」も社会主義的な色調である¹⁸。

1958年の馮至監修の『徳文文学簡史』では政治的立場からのグリム童話評価はなされていない。1964年には張鉄林が『格林童話宣揚什麼』（グリム童話は何を宣伝したか）という批判文を発表し、「グリム童話を褒め上げて児童に推薦するべきではない」という結論を主張した。当時の文芸界の立場の表明であったが、各方面の批判を引き起こすまでの結果をもたらさなかった¹⁹。

文化革命は出版業界全体に打撃を与え、児童文学も例外ではなかった。書籍の内容においても制限があり、児童文学は階級闘争の道具として利用された²⁰。西欧童話の翻訳も政治的バイアスがかかり、統治階級や迫害される下層民というような観点に合わせて登場人物の

構図が改編されることがあった。

1978年からの改革開放政策以降、様相が変わった。そして現代にいたるまでグリム童話が中国で再び広く受容されるようになったのである。旧訳の重版や精選版、中英対訳本など、多数の図書が出版されている。1980年代以降の翻訳については後述する。

4. 文語文から口語文へ

次に、中国語翻訳史を言語面から追っていこう。グリム童話が翻訳され始めた頃は白話運動の始まる時期でもあった。翻訳における白話文（口語文）の採用は、日本の言文一致運動と類似の現象である。

最初の中国語訳『新庵諧訳初編』（周桂笙、1903年）は文語文である。というのは、文語でないものは文学性に欠けると感じる知的読者の常識があり、文語訳をするのが自然だったのだ。しかし、書物の言葉と話し言葉の分離は、子どもを含む大衆と、文語文翻訳童話との隔たりを作る。そのため、グリム童話受容も限定的だったと考えられる²¹。文語文翻訳の場合、原文をそっくり中国語に変換するというより、翻訳者のリライト版であることが特徴である。伝統的な倫理道德を含む中国古来の逸話を基に、翻訳童話を加工して教訓を加えていった。翻訳童話の目的も、自ずと教訓話による中国の人々への教育と啓蒙となっていた²²。『童話』（孫毓修、1909-10年）の訳文も口語文をめざしていたが、まだ文語文の影響が残っている。そのほかの同時期の翻訳は基本的に文語訳である。『児童和家庭童話集』（時諧、1915年）も文語文である。

1917年に胡適が提唱した白話運動は1919年以降の新文化運動（五四運動）と連動して歩を速めていった。出版される書物の様相も変化した。封建思想や古い思想、古い道德を否定し、個性を重視して独立した人格を提唱する文学運動である雑誌『新青年』が出版されるなど、方向性が明確だった。翻訳児童文学も、この流れに沿うように発展していった。

新文学運動の担い手の一人、趙景深は翻訳家であると同時に戯曲研究家で教育家でもあった。翻訳は児童の発達過程を重んじ、ちょうどよい長さの口語文で、内容も児童の趣味に沿った鑑賞ができるような文章を書くことを目指していた。『格列姆童話集』（1928）もその理念、つまり「児童本位観」を守って翻訳されている。

文語から口語へという言語表現上の変化に伴い、外国由来の物語をどう伝達するかという、翻訳のやり方そのものにも変化があった。『童話』の編集翻訳者の一人である茅盾は作家・評論家として新文化運動の先駆者であるが、この問題についてこう主張している。「文学者の責任は西欧のものを全く変えずに紹介することである」、「かつてはretold（改編）されていた童話を直訳すること」（が良い）²³。理想は原文に忠実な翻訳で、擬声語や擬態語を使用し、ヨーロッパ式の句読点を用いる方法である。語気を表現し、口語化された短い文を積み重ね、結果として、子どもの理解を大いに助ける文体になった。また、中国文化に合わ

せて登場人物を改変することもしなくなった。原作の異文化的な成分や雰囲気が保たれるようになった。

子ども向きということは、同時に大衆向きでもある。翻訳言語の口語化により、中国の子どもと大衆がグリム童話翻訳書を手に取りやすくなった。こうして、グリム兄弟が伝えたかった世界そのままに、物語を親しむ土壌が中国にも作られていったのである。

5. 魯迅と周作人

新文化運動の中心であった魯迅（周樹人1881－1936）と周作人（1885－1967）の兄弟は作家・翻訳家として有名である。著作は多彩だが、特に弟の周作人は児童文学の分野に功績を残している。青年期にヘルダーやフレーベルの思想にも触れ、グリムやアンデルセンの童話を中国語に翻訳し、中国における児童文学研究と翻訳の先駆者でもある²⁴。

彼らの関心の方向は、日本の児童文学の動向とも無関係ではない。魯迅は1902年から1909年まで、周作人は1906年から1911年まで日本に留学・滞在した。この体験も彼らの業績に強い痕跡を残している。日本は一足早くヨーロッパ文化と接触を始め、封建制度を廃し、思想・科学の刷新を図っていた。彼らが正統時代の文学活動に浸り、白樺派や「赤い鳥」の童心主義に共感を覚えたことが、「童心主義」と「児童本位」につながっている²⁵。中国と日本のヨーロッパ児童文学受容の実態が絡み合っていることは興味深い。

清朝末期の洋務運動（1860年代前半～1890年代前半）はヨーロッパからの科学技術を導入し、近代化を目指すものだった。これは数十年先んじて日本が体験した「文明開化」に似た現象である。清朝末から中華民国初期に押し寄せた西学東漸の波により、進歩的なヨーロッパの自然科学、社会科学の文献が翻訳され、新しい児童観が次第に受け入れられるようになっていった²⁶。そして、伝統的で封建的な中国の道德観が、ヨーロッパ流を規範とする風潮に変化し、児童に対する新しいまなざしが生まれたのであった。教育の場から排除された伝統的な書物の代わりに登場したのが、ヨーロッパの情報だった。それに応じて、教育用教材として科学読み物を取り入れる啓蒙主義的教育観があったが、周兄弟はこの点には懐疑的だった。実用のみを重んじる新しい教育方針に強く反対し、児童のための読み物がふさわしいと考えていた。その上で童話を教訓性と結びつけることは否定し、むしろ自由な幻想性こそ童話の本質であり、児童に相応しいと考えていた。このような「児童本位」が児童文学の基準になると提唱した。また、同時に重要視したのは「童心主義」だ。この思想は直接的には「赤い鳥」の鈴木三重吉や小川未明の影響だと考えられる。

周兄弟は、子どもを「小さな大人」として訓練し、儒教に基づく従順さや忠誠心を教育の目的とするのではなく、子どもが年齢相応の教育を受け、学ぶ力を促進することが必要だと考えた。そして、それまで軽視されがちであった童話、説話、伝説などの文学ジャンルを好意的に評価している²⁷。

周作人は伝統中国と全く別の価値観で人間社会が存在しうることをヨーロッパの物語から読み取っていた。例えば、「童話や伝説の中などで帝王のことを述べる際に、その有様はとても尊いとはいえ、帝王が自ら働くさまは常人と異ならない」と説明している²⁸。登場する王さまやお姫さまの思考や言動が、農民や漁民と変わらないのはヨーロッパの伝承物語表現の常であるが、身分のある人を卑近に描写する記述が周作人の目を引いたのだ。

また、グリム兄弟の童話・伝説収集に倣い、出身地である紹興の歌謡を『紹興児歌童話集』（1914）にまとめている。日本留学中の1910年頃に柳田国男『遠野物語』を入手しており、土着の文化を記述収集することをわが身に引き付けて意識するようになったのであろう²⁹。『紹興児歌童話集』は版を重ね、紹興の歌謡が国中に知られることになった。このように、周作人は真理探究のために起源に遡る必要があると考え、文芸を知るために神話、民話、伝説、童話に目を向けていた。彼自身、グリム童話を読んだ当初はその良さが理解できなかったが、民俗学の書物を読んだ後に値打ちが分かった、と記している。グリム童話の価値は、収集した資料に手を加えることなく記述した点にあると、童話の学術的意義を理解していたのだ³⁰。グリム童話が実際は聞き取り記録ではなく、約50年かけた改稿の末に整えられた物語であることは現代では常識であるが、この時代はそのような認識がなかった。周作人はグリム兄弟の作業過程そのものも理想化してとらえていた。

周作人はアンデルセン童話の翻訳6編を合わせた『十の九』（陳家麟・陳大鏡訳、1918）について酷評している³¹。その文面から、当時の翻訳文化と、それに飽き足らない周作人の理想が読み取れる。中国語翻訳の難しさについては「たとい十分仔細にやっても、原意を留めるのがせいぜいで、本来の調子を伝えることはできない。」「外国の異教の著作を、みな司馬遷・班固の文章、孔孟の道德に変えてしまう。」と述べられている。『十の九』の訳文については、原文にない「教室の修身の格言」を付け加え、登場人物の設定や事物を改変し、挿入された童話を省略するなど、あらゆる点で不愉快であると批判している。「童話の児童教育上の働きは文学的教育にあり、道德ではないと思う。」と言っている³²。余計なことをせず、原作をありのままに翻訳して伝えることこそ翻訳者の仕事である、という周作人の考えは、グリム兄弟の童話収集の文献学的態度に似ている。創作童話であるアンデルセン童話はグリム童話と成り立ちが異なるが、翻訳者という立場は伝承童話であろうと創作童話であろうと同じである。この確信に至ったのは、文献学と民俗学を知る周作人の学識ゆえだ。

周作人は日本統治時代の傀儡政権への協力を咎められ、1945年以降追放された。1980年の名誉回復以降、その功績が再評価されることになった。児童文学研究においても周作人の理念について言及されるのはそう古いことではない。周作人に触れずに中国の児童文学、ましてグリム童話受容について語ることはできないだろう³³。中国におけるグリム研究論文は1979年から1999年の間でわずか7篇である。その後は一貫して増加傾向にあり、2000年から2012年の間に46篇が発表されている³⁴。最近の状況をデータベースで調査したところ、2021年の一年間で、学術雑誌に掲載されたグリム童話研究論文は6編、グリム童話との比較で現

代文学を論じるもの 1 篇であった。このほか、読書教育・倫理教育に関連してグリム童話を扱うものが 7 編ある。読者である子どもの発言としては、公開されている子どもの作文に、文字が読めない頃からグリム童話に親しんでいた、という記述もあり、中国の児童文学として今や完全に定着している様子が分かる³⁵。

6. 翻訳版の原典

ところで、中国語版グリム童話は、何語から翻訳されたのだろうか。総じて日本語訳の状況と同じで、原典を記していない場合が多く、原典不詳のものが多い。グリム童話集は初版出版直後からヨーロッパ言語に翻訳されている。英訳は1823年に1巻、1826年に2巻がエドガー・テイラー訳 „German Popular Stories“ のタイトルで出版された。テイラー版はドイツ語原文を児童向きに加工した箇所もあり、ヨーロッパで大変人気があった。ドイツ語原典よりも、むしろ英語版が各国語版の翻訳底本になった理由は容易に推測される。版を変えて出版され続けたテイラー版以外にも、1800年代に約30の英語版グリム童話集が出版されており、グリム童話の人気のほどがうかがえる³⁶。また、ほかに、個別の物語を翻訳翻案した本が数えきれないほど存在するため、翻訳原典の特定化が困難である。

最も古い翻訳『新庵諧訳初編』（上海清華書局、1903）は英語からの翻訳であった。『童話』（商務印書局、1909－1910）は英語からの重訳で、そのうち孫毓修の原文については典拠が分かっている³⁷。

ドイツ語からの直接翻訳は王少明が10編を選んだ『格爾木童話集』（開封河南教育庁編訳処、1925）が最初である。王少明はその後1936年に三冊、合計33編を含むグリム童話集を翻訳出版している。王少明は自著で「我が国のグリム童話訳は私が見たところでは原文と合っていないことが多い。なぜ翻訳者が書き換えたのか、故意なのかどうかはわからない。また、ドイツ語原文から訳していないということも明記されていない。私以外の翻訳者は加筆や省略をしている。本書は原文、つまりドイツ語の文章を翻訳している。その内容に対応しており、加筆も省略もしていない。」と述べている³⁸。従来の翻訳を批判し、自著がドイツ語原文をそのまま伝えていると自負している。王少明は児童の人格を大切に、児童用文学の発信を意図した「児童本位」の思潮に同調していた。「私の小さな希望は、私がこの世界的に有名な童話を小学校の先生たちに紹介し、先生方がそこから選んで教科書として使うよう手元に置き、天真爛漫な子どもたちに与えて、子どもたちの心の要求と遊び心を満たすことだ。」と「訳者の言葉」で述べている。また、例えば『古怪的鏡子（白雪姫）』については「この童話は児童の課外読み物に適切である。」とコメントを加えている。王少明は重訳を批判したが、ドイツ語直訳のグリム童話が標準になることはなかった。この頃の訳は英語または日本語からの重訳であった³⁹。

次の時代、中華人民共和国建国後の出版界は国家指導下にあった。1950年代の政府は翻訳

事業を重視し、第一次文学翻訳工作会、全国文学翻訳工作会などで、何をどう訳すかが決定された。児童教育は「国家運命の前途に関わる」地位を与えられ、ロシア語からの翻訳事業が盛んにおこなわれた⁴⁰。グリム童話についてもロシア語からの重訳が出版されたことが、特徴的である。例えば『年輕の巨人』（丘陵、1954）『風雪老婆婆』（寇清林、1956）『三兄弟』（李蟠、1956）はロシア語からの重訳である⁴¹。

7. 1980年以降について

再び、「児童本位」の理念に戻り、児童のために翻訳するという出版哲学が復活した。およそすべての有名児童文学が翻訳されるようになった。古典童話の新訳が生まれ、個別の絵本はもちろんのこと、全集、精選版、要約版、改編版、挿絵版、漫画版、中英対訳版など、子どもの成長や好みにあわせて選べるほどである。全集版もアンデルセン童話全集は三種、『ニルスの不思議な旅』は二種の版が存在するなど、翻訳文化が成熟した。前述のとおり、中国人は幼少期から自然に外国童話に触れている環境にある。

中国語のグリム童話全訳版は長らく魏以新訳の一種類のみであった。それが、1980年から2020年にかけて次々とグリム童話全集が出版された。魏以新も含め、比較的入手容易な6つの版について特徴を述べていこう⁴²。

初めてグリム童話全集の全訳をてがけた魏以新（1898－1986）はどのような人物だろうか。彼は同済大医工専門学校独文科で学び、卒業後は同大学図書館に勤務する傍ら、翻訳者・作家として多くの仕事を残した。グリム童話の他、ヒンデンプルク自伝やジーマス自伝の翻訳、ドイツ語文法入門などの著作がある。1934年版の「訳者の言葉」は短いものだが、そこには、LeipzigのHesse & Becker Verlag出版の原文を使用したこと、また、同済大学ドイツ言語学教授オトマー教授（Prof. Dr. Othmer, 1882－1934）の助力への謝意が述べられている。「ドイツ語のグリム童話集の210編のうち＊を付した21編は方言が使われており、ドイツ人の六割が完全には理解できなかった。しかし訳者はオトマー教授のもとで日夜働いていたので、教授に説明を受け、完全に翻訳をすることができたのは幸福なことであった。教授はそのほかの様々な疑問も解説してくれた。ここに感謝の意を表明したい。」⁴³

オトマー教授と魏以新の出会いは歴史のめぐりあわせである。興味深いことに、オトマーは日本とも関係のある人物だ⁴⁴。多言語にまたがり語学の才能に秀でているオトマーは、ベルリンで博士号取得後、中国人へのドイツ語指導のため1907年に北京に渡った。その後ドイツ勢力下にあった青島に移り、中国人にはドイツ語を、在中ドイツ人には中国語を指導した。第一次世界大戦のドイツ敗戦のため1914年に捕虜として大阪に移送され、その後は広島に似島俘虜収容所で過ごした。ここで日本人にドイツ語を教え、また自身は日本語の習得に励んだ⁴⁵。1920年に中国に戻り、上海の同済大学教授に任命された。魏以新が教えを受けたのはこの時期である。1933年に病に倒れドイツに帰国し、1934年にゲッティンゲンで亡くなっ

た。オトマーが中国から広島に来て日本人と交流し、再び中国に戻って魏以新のグリム童話翻訳を助けたと知ると、感慨深いものがある。

1980年に二番目の全訳『格林童話全集』（林懷卿、全三巻、聯経出版社）が翻訳出版されたのは台湾においてであった。作家、児童書の画家など、十一名の専門家集団が企画し、正確でありながら年少者むきの図書になるよう配慮した版である。日本語翻訳家の林懷卿が高橋健二訳『グリム童話全集』（全三巻、小学館、1976年）を全訳した重訳だ。なお、台湾において、外国語書籍を日本語から翻訳することは珍しくない。ドイツ語と比べると近似性の高い日本語からの翻訳は容易であり、歴史的背景からも日本語翻訳者のほうが多いという事情による⁴⁶。高橋健二の「グリム童話集について」「グリム兄弟の一生」、訳者解説付きの『子どもと家庭のメルヒェン』の初版版序文「ベッティーナ・フォン・アルニム夫人にさげることば」も訳されている。構成は改変があり、高橋健二の個人的事情を感じさせる部分、つまり日本語版一卷冒頭に置かれたドイツグリム兄弟前館長で著名なグリム研究者ルートヴィヒ・デーネッケの「日本の読者に」、それに続く高橋健二の「訳者まえがき」は訳出されていない。その代わり原典一卷巻末の「グリム童話集について」が置かれている。この版は縦書きで、グリム童話全文に注音記号がつけられている。幼児や小学校低中学年でも読むことができるよう、子どもへの配慮がされているのが特徴である。そして解説には注音がっていない。高橋版も同様の配慮があり、童話部分は総ルビつき、解説部分は振り仮名がほとんどつけられていない。文字だけにならないよう挿絵に気を配り目立たせている点なども、双方に共通する特徴だ。子どもが読むための童話部分と、成人の興味に耐えうる学術的解説の両立を図っている版である。この版は五巻本に分冊しなおした改版もある（林懷卿訳、林鐘隆・藍祥雲監修、聯経出版社、2001）。なお、拼音をつけた全集は存在しない。

続いて1993年にドイツ語原文⁴⁷から翻訳された『格林童話全集』（全三巻、楊武能訳）は、中華人民共和国建国後、初めての全訳である。この版は優れた現代語訳として、装丁を変えながら版を重ねている。グリム童話初版出版200周年に合わせ、カラー挿絵を加えた「二百周年記念版：経典插图珍藏本（2012）」「二百周年記念版：彩色插图珍藏版（2013）」の特別版も出版された。訳者はゲーテ研究で著名なドイツ文学研究者で、ゲーテ、トーマス・マンなどの古典作品を多数翻訳している。研究者でもある訳者は、中国のグリム童話翻訳史と、ドイツ文学史を理解した上で翻訳を行っており、この版でグリム童話の中国語訳は質的に向上したと言われている⁴⁸。原文を損なうことなく、ドイツ語を「中国化」し、かつ「児童化」した翻訳が実現されている。楊武能は彼の論文集についてのインタビューの中で、文学翻訳家、学者、作家の三役を同時に実践する「三位一体」の難しさと必要性について語っている⁴⁹。その言葉通り、楊版のグリム童話全集は独特の気風がある。研究者ならば、ついグリム童話の成立過程など注釈をつけたくなるものだろうが、楊版の重点は童話である。とりわけ目をひくのが前書きだ。「永遠の暖かさ一序に変えて」として、4連38行の創作詩が読者に語りかけている。「すばらしいよ、この兄弟の小さな宝箱は／子どもよ、耳をかたむけて

ごらん、宝箱がきみのために歌っているよ／穏やかで心を動かす歌を／勤労と善良を褒めた
たえ、忠誠と正直を褒めたたえ／進んで加勢する勇士を褒めたたえる／長いこと眠りから覚
めない娘を起こすため／ひたすら前に進む、失敗を恐れずに …」と、自著を宝箱になぞら
えて読書を促す。そして、グリム童話集が本来「子ども」のものではなく「子どもと家庭の」
ものであることを強調するのを忘れていない。「きみと、私と、彼と—きみたちと私たち／
今日の子どもたちと昔の子どもたち／どの世代も、この宝箱を枕にして／夢の世界に入り、
幻想的な天の国に入っていく／美しい姫になり、勇敢な王子になり、…」。

2000年の『初版格林童話』（全四巻、許嘉祥・劉子倩訳、旗品出版社）は中国語初のグリ
ム童話初版の翻訳で、台湾で出版された。グリム童話初版は刊行当時、残酷な場面や性的な
記述が子ども向きではないと批判され、二版以降で改稿されることになった。つまり、初版
には、グリム兄弟が聞き取り収集した記録の、残酷で性的で粗雑な語り口が保たれている。
文献学上、最初に出版されたオリジナルを最重要とする考え方もあり、初版はそれとしての
価値がある。その観点から、初版は普及している第7版（最終版）との比較対象として読者
の好奇心を集める版である。訳者はどちらも日本語翻訳者で、許嘉祥は『島耕作』シリーズ、
『宇宙兄弟』等の人気漫画や軍事物の翻訳で知られ、劉子倩は太宰治、村上春樹、東野圭吾
など、幅広く翻訳を手掛けている。これは『初版グリム童話集』（全四巻、吉原高志・吉原
素子訳、白水社、1997）からの重訳である。同年に同書を抜粋した名作選『初版格林童話（精
華版）』（許嘉祥・劉子倩訳、旗品出版社）も出版されたが、こちらにはドイツ文学研究者の
林愛華副教授（刊行当時）の短い読書案内が冒頭に付されている。1980年の版といい、重要
な翻訳版が台湾では日本語から重訳されていることに、日台関係の深さがあらためて確認さ
れる。

そして2001年、台湾で初めてドイツ語から直接翻訳した『格林童話故事全集』（全四巻、
徐珞・余曉麗・劉冬瑜訳、遠流出版社、2001年）が出版された。全編にオットー・ウッペロー
デの挿絵をつけ、統一感のある体裁の本である。一卷冒頭に陳良吉の小論「グリム童話とロ
マン派のドイツ民間文学」が掲載されている。グリム兄弟の生い立ち、グリム童話成立の背
景、ドイツロマン派文学の特徴、童話集の編纂のいきさつ、グリム兄弟のドイツ語・言語学
への貢献、初版への批判、などの問題点が簡潔に説明されている。各巻末に読者の興味を広
げる関連のウェブサイトのURLが掲載されている点が新しい。第一巻は中国語とフランス
語の書籍検索サイト、第二巻はドイツのサイトで、グリム童話、メルヒェン一般、グリム兄
弟ゆかりの町などの関連情報で、第三巻は英語のサイト、第四巻は日本のサイトの案内であ
る。残念ながら、情報元の組織改編などでサイトが存在しないものもある。なお、ウェブサ
イトの常としてサイト変更の可能性があることを了解してほしいと訳者が明記している。こ
のほか、第四巻にはグリム兄弟の年表と、ベッティーナ・フォン・アルニム宛ての1843年の
手紙の訳が付録として掲載されている。台湾の二つの版を比べると、2001年の版は横書きで
活字は小さく、注音は一切ついていない。子どもに対する特別な配慮がされていない分、洗

練された印象を与える体裁である。

最新の全訳は、人民文学出版社から2019年に出版された『格林童話初版全集全注解本』（姚了了訳）で、英語版 „The Original Folk and Fairy Tales of the Brothers Grimm : the complete first edition / Jacob and Wilhelm Grimm ; translated by Jack Zipes ; illustrated by Andrea Dezsö“ (Princeton University Press, 2014) の忠実な翻訳である。1968年生まれハンガリー系ルーマニア人、アンドレア・デジョーの装丁画と挿絵が本を特徴づけている英語版を構成もそのまま中国語で一冊の本に写している。切り絵影絵調の深紫の装丁は「1812/1815年の黒暗童話、全新的増補更令人毛骨慄然」と書かれた帯と相まって、手に取る読者は表紙を一目見たときから初版本の闇の部分に期待するだろう。藤城清治の影絵が懐かしく思い出されるような雰囲気だ。表紙と同じく影絵調の挿絵がそれぞれ一ページのサイズで多数挿入されている。英語版は各方面から絶賛を浴びている。内容は学術的で、中国語翻訳にあたり、注釈部分を含めた英語版の忠実な翻訳に加え、中国語翻訳に伴う追加の注も付けられている。

ところで、上述の通りグリム童話は子供に読ませたくない部分を隠すために改版された経緯がある。この事情を知る大衆は、改稿前の童話がどんなだったのか気になるものである。初版本の出版は一般読者の知的好奇心を満たす効果もあっただろう。

初版の邪悪な部分に対する幻想が膨らみ、実際以上に暗闇を肥大させた創作が日本で発表され話題を呼んだのは、20世紀末前後のことであった。日本と台湾での初版本出版に重なる時期だ。『本当は恐ろしいグリム童話』（桐生操著、KKベストセラーズ、1998）は直後に中国語訳『令人戰慄的格林童話』（許嘉祥訳、旗品文化出版社、1999）として出版され、よく売れた⁵⁰。引き続きこのシリーズおよび類書の多くが中国語に訳されている。グリムと名称がついていても内容はグリム兄弟の真意からかけ離れたもので、あくまで娯楽的な創作である。グリム原典研究の対象にはならないが、怖いもの見たさの気持ちもあり、中国語圏でも一定の人気があるようである。

8. おわりに一童話とは

グリム童話集の原題「子どもと家庭のメルヒェン」を、日本語・中国語の翻訳タイトルでは「グリム／格林童話」とするのが現在では標準になっている。語源などの説明は本論では省略するが、ドイツ語のMärchenは独自の文化現象であり、外国語の一つの単語で表すことは難しい。日本語・中国語文化圏で「メルヒェン」が「童話」として定着した経緯を振り返り、本論を終えることにしたい。

最も古い日本語グリム童話の標題は『神仙叢話』（1887）であり、英語のfairy taleの日本語訳だ。これはむしろ中国文化の影響でつけられた書名である。神仙とは東アジアの宗教観では、例えば道教思想の神と仙人、また仏教では八部衆など神通を持つ存在を神と称するた

め、「神仙」というと別の伝統の文脈が含まれてしまう。とはいえ、他に適切な語がないため、人ならぬ存在fairyを神仙と訳出したのだろう。1897年（明治30）に「修身童話」が公刊されたことから、この十年の間に「童」つまり「子ども対象」という意識が強くなっていったことも分かる。

「童話」の語を意味付けと共にグリムのメルヒェンに定着させたのは金田鬼一の『グリム童話集：全訳』（岩波文庫、1938）であろう。第一巻の序文に、「童話とは児童のプシュエスなわち童心ともいうべきものを作者とする作り話であると信じているがゆえに、この訳本の標題は『児童および家庭お伽噺』という長い名称を用いず、簡単に『グリム童話集』としておく。この名称はグリムの真意に添わないものではない。」と定義している⁵¹。グリム童話普及初期の意識では児童が対象なので「童話」であったのが、金田によると年齢ではなく「童心」という、誰もが持つ心のありようをもって「童話」としたところが用法の変化である。

「童話」の語源についても金田版序に説明されている。「童話という造語を作ったのはおそらく京伝」だと解説している。山東京伝（1761－1816）は随筆集『骨董集』（1814－1815）で、『異制庭訓』（14世紀頃）のなかの「むかしむかしちちとばばとありけり」で始まる語、「祖父祖母之物語（じじばばのものがたり）」を「童（わらべ）の昔ばなし」とし、短く「童話」（どうわ、または、むかしばなし）と読ませている。

京伝は「虎関和尚の異制庭訓は、今文化十年より、凡五百年前の書なれば、祖父祖母の童話（むかしばなし）のふるきをおもふべし。五百年前の童話（どうわ）、唯童（わらは）の口ずさみにつたふるのみにて、今に残れるは不思議といふべし。なほ愚考あれども、他日童話考を刻すべき志あれば、こゝにはもらしつ。」と書いている⁵²。具体的に「打出小槌」と「猿蟹合戦」の典拠をたどり、日本古典はもとより、源流として中国の文献に行きついている。完全に一致する話はなく、部分的に類似する逸話を複数挙げている。

「童話」の漢字二文字に限って言うと、曲亭馬琴の随筆『燕石雜誌』（1811）での用例の方が古い。ただし、馬琴は「わらべのものがたり」と読ませている。馬琴は「桃太郎」「竹取物語」「桃太郎」「舌切雀」「花咲翁」「兎大手柄」「獼猴の生膽」「浦島之子」を挙げ、関連する話や、筋運びの合理性を説明するための根拠となる原典を載せている。『古事記』『旧事本紀』『宇治拾遺物語』『今昔物語』などの和書ばかりでなく、「唐土の小説」にも遡っている。例えば、『搜神記』（4世紀）、『続夷堅志』（13世紀）、『続博物誌』（李石、1505）⁵³。

京伝と馬琴の挙げた童話は、現代では「むかしむかし」で始まる「昔話」の範疇に入れられるだろう。興味深いのは、両者が口頭伝承であることを承知し、起源を探ろうとしている点である。そして、当然のように東晋、南宋、金の書とも結びつけている。その童話が大陸から伝わったのではないか、と思いを馳せているのである。

そして、「童話」の語は、日本から中国に渡った外来語である。最初のグリム童話集の中国語タイトルは『新庵諧訳』（1903）、『時諧』（1909－1910）だったが、1909年に『童話』が出版されると、その後は物語集については「童話集」の標題がつけられるようになり、中国

語として定着していった。中国語の「民間故事」の語が意味するものはメルヒェンに近いが、中国土着の印象を与えるためなのか避けられている。新語の「童話」が翻訳文学にふさわしく感じられたのかもしれない。ただし、周作人はメルヒェンを童話と訳すことに異論があった。グリム童話を紹介する文脈で、子どものみが対象ではないのでむしろ「民間故事」というべきだ、と主張している⁵⁴。とはいうものの、結局中国語でも「童話」が定訳である⁵⁵。「神仙叢書」が江戸の言葉「童話」に変わり、「諧」「民間故事」が「童話」に変わり、「童話」の漢字二文字が日本と中国文化を行き来していることは実に興味深いではないか。

本論ではグリム童話の東アジアにおける受容として、日本語と中国語翻訳の変遷を論じてきた。近代への転換期という共通の背景で、グリム童話翻訳が果たした役割を確認することができた。西欧に学び、西欧の子どもと同じ物語を読むことは、児童の近代化だった。同時に、文語文から口語文へと教育内容を変化させる上でも、翻訳童話の普及は効果的であった。グリム兄弟の収集した平易でおもしろい物語は、広く大衆に受け入れられるものだった。日本では道德教育教材の利用から外れて、安定的な地位を逃したやに思われたが、それが功を奏して、年齢を問わず「童心」を持つ読者の手に届くようになった。グリム童話のもう一つの側面、つまりグリム兄弟が民族の独自性を謳う意図は理解されなかった。日本の翻訳界はこの点に無関心だったように思える。グリム兄弟と同時期の江戸時代に、既に昔話を含む書物を出版していた日本では、昔話を中国古典と関連させ、相対化して考察していた。むしろ日本昔話を肥大させ、大きな世界の中でとらえることに関心があったのだ。グリム兄弟の資料収集研究者としての功績の影響は、柳田国男の民俗学に始まる別の文脈で成果をあげている。グリム童話は、新しい思想を運ぶヨーロッパ文化の一部として日本で受容されたのである。

一方、新文化運動の中国においては、例えば周作人はグリム兄弟の気概をも受け止めていた。この差は、グリム童話受容初期の、両国の社会情勢の違いによるものだ。グリム童話受容と翻訳状況は、その後も社会体制の変動に影響を受けている。停滞する時期もあったが、現在は、文字通り字も読めない子どもの頃からグリム童話に触れるという状況にあり、日本との違いがなくなっている。全訳版も豊富で、日本語からの重訳版を含め多彩な中国語版全訳が存在している。グリム童話が誕生してから、二百年余り。グリム兄弟は東アジアのますます旺盛なグリム童話受容に驚くことであろう。

1 Brüder Grimm Gesellschaft. <http://www.grimms.de/> 最終閲覧2023.1.15.

2 初版は161編、第7版は200篇を含む。日本では初版、第2版、第7版、また初版以前の初稿（エーレンベルク稿）が翻訳出版されている。

3 府川源一郎「アンデルセン童話とグリム童話の本邦初訳をめぐって－明治初期の子ども読み物と教育の接点－」『文学』第9巻第4号、岩波書店、2008。

- 4 グリム童話第152番。「ROMAJI ZASSHI」掲載。奈倉洋子『日本の近代化とグリム童話 時代による変化を読み解く』世界思想社、2005。
- 5 菅了法『神仙叢話：西洋古事』集成社書店、1887。
- 6 須田康之『グリム童話〈受容〉の社会学－翻訳者の意識と読者の読み』東洋館出版社、2003。
- 7 上掲書、第三章「グリム童話の翻訳・翻案」。前掲書『日本の近代化とグリム童話』第一章「学校教育の中のグリム」。
- 8 前掲書『グリム童話〈受容〉の社会学』第四章「明治期の雑誌からみた受容の特徴」。
- 9 坂本麻裕子「修身に残らなかったグリム童話－樋口勘次郎の『修身童話』をテキストに」『言葉と文化（名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻）』第10巻、2009、pp.223－241。
- 10 前掲書『日本の近代化とグリム童話』第二章「言文一致運動、国語改革、標準語教育とグリム」。
- 11 馬福華「百年來西方童話在中国的翻譯与傳播」『出版發行研究』2021（第1期）、pp.98－105。
- 12 杜荣「《格林童話》在中国的傳播与接受－紀念格林童話誕生200周年」『德国研究』第27卷総103卷第3期、2012、pp.98－128。
- 13 Nation und Narration, Eine vergleichende Untersuchung der Beiträge der Brüder Zhou und der Brüder Grimm zur Folklore, Wang Libing, in: Ost-westliche Erfahrungen der Modernität, 2020, Vol.6, pp.133－140, Berlin und Boston. グリム兄弟と周兄弟（魯迅と周作人）を対比させ、周兄弟の伝承文学紹介と研究における功績を論じている。翻訳されたグリム童話は „Strohhelm, Kohlen und Bohne auf der Reise“ と „Die Rübe“ の二編。
- 14 呉建福「〈格林童話全集〉魏以新訳本分析」『漳州職業技術学院学報』第13巻第4期、2011、pp.69－73。
- 15 杜荣、前掲書、p.101。
- 16 魏以新『格林童話全集－兒童和家庭故事』人民文学出版社出版、1988年。
- 17 Engels, Landschaften (etwa 1839/1840) in: Karl. Marx/Friedrich Engels, Über Kunst und Literatur in zwei Bänden, Berlin, 1968. 2.Bd. pp.460－46. 和訳引用は『風物』（山口浩訳『マルクス・エンゲルス全集』第41巻、大月書店、1973）による。
- 18 Liang、前掲書、p.63。
- 19 杜荣、前掲書、p.102。
- 20 馬福華、前掲書、p.102。
- 21 付品晶「《格林童話》漢訳流传与変異」『西南民族大学学报（人文社科版）』第198期第2期、2008、pp.148－150。
- 22 馬福華、前掲書、p.100。
- 23 馬福華、前掲書、p.101。
- 24 杜荣、前掲書、p.99。
- 25 伊藤敬一「周作人と童話」『人文学報』第42号、1964、pp.1－22。p.7参照。
- 26 馬福華、前掲書、p.103。
- 27 Liping、前掲書、pp.136－137。
- 28 周作人『童話研究』（周作人著、止庵校訂『童文学小論／中国新文学的源流（周作人自編文集）』所載）、河北教育出版社、2002。
- 29 王京「戦前期における日中民俗学の関わり」『神奈川大学国際常民文化研究機構年報』第2巻、2011、pp.95－112。
- 30 周作人「アンデルセンの『十の九』」（中島長文訳注『周作人読書雑誌3』所載）平凡社東洋文庫889、2018。
- 31 前掲書。

- 32 李瑩瑩「民国時期的童話翻譯中文類問題－以《白雪公主》在民国時的翻譯為例」『貴州社会科学』2017。
- 33 湯麗敏「中国の児童教育と児童文学の発展における周作人の役割〈五四時期の周作人の児童教育童文学観〉」『国際教養学部紀要（富山国際大学）』第2巻、2006、pp.143－148。
- 34 杜荣、上掲書、p.105。
- 35 中国期刊全文数拠庫 CJFDで調査。中国知網 www.cnki.net、最終閲覧2023.1.15。
- 36 D. L. Ashliman, "Grimms' Fairy Tales in English: An Internet Bibliography. <https://sites.pitt.edu/~dash/grimm-engl.html>、最終閲覧2023.1.15。
- 37 Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm in China: Rezeption und Wirkung, Yea-Jen Liang, Wiesbaden, 1986.「孫毓修童話の来源」（趙景深『民間故事叢話』所載、国立中山大学民俗学叢書、1930）に、英文読本の書名と孫訳に対応する英文書籍タイトルが挙げられている。
- 38 李瑩瑩、前掲書、p.48。
- 39 張素玫「格林童話的百年中訳と伝播」『貴州師範大学学报（社会科学版）』総第215期第6期、2018、pp.104－112。p.107で日本語からの重訳版について触れているが具体名が挙げられていない。残念ながら原典を確かめることはできなかった。
- 40 付品品、上掲書、p.149。
- 41 杜荣、上掲書、p.101。
- 42 本論で扱う以外、謝武彰訳（1990）、舒雨・唐倫億訳（2001）の全集がある。
- 43 陸霞「走進格林童話」第21章。<https://www.xstt5.com/pinglun/14477/>、最終閲覧2023.1.15。
- 44 <http://china-oldenburg.de/2022/03/professor-dr-wilhelm-othmer/>、最終閲覧2023.1.15。
- 45 オトマーは、中目覚『ニクブン文典』（三省堂、大正6年、1917）を翻訳出版している。『独訳ニクブン文典』（『亜細亜研究』第5号、大阪東洋学会、1927、Grammatik der Nikbun-Sprache [des Giljakischen] von Nakanome Akira: aus dem Japanischen übersetzt von W. Othmer）。中目覚は日本語版前書きに「大正六年一月広島に於いて」と記しており、オトマーははじめドイツ人俘虜と広島で接点があった可能性がある。1927年の翻訳版には大阪外語大学学長中目覚、とある。中目覚は若い頃にドイツ語教授を務めた後ウィーン大学に留学し、帰国後は各地の大学で要職についた人物である。
- 46 Yea-Jen Liang、上掲書、p.66。
- 47 原典テキストは Brüder Grimm, Kinder- und Hausmärchen, Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm, Mit einem Anhang sämtlicher, nicht in allen Auflagen veröffentlichter Märchen und Herkunftsnachweisen herausgegeben von Heinz Rölleke, in 3 Bd., Philipp Reclam, Stuttgart, 1989。
- 48 付品品、上掲書、p.149。
- 49 段峰「三葉一芽三位一体－楊武能教授訪談録」『外国文学研究』第28巻（5）、2006、pp.7－12。
- 50 嚴淑女「二〇〇〇年台湾地区文学類童書翻訳出版現象之觀察」『児童文学学刊』第5号、2001、pp.114－134。
- 51 金田鬼一『完訳グリム童話集（一）』岩波文庫、電子書籍版、2018年。
- 52 山東京伝『骨董集』上編中之巻。（『骨董集全、燕石雜誌全、用捨箱全』朋堂書店、1915）所載。
- 53 曲亭馬琴『燕石雜誌』巻之四。前掲書所載。
- 54 Liping、上掲書、p.135。
- 55 『格林童話故事全集』（遠流出版社、2001）が唯一「故事」の語を含む標題である。

（本研究は科研費21K00465の助成を受けたものである。）